

開府 名古屋の都市づくり

— 家康の考えたこと —



小治田之真清水

池田 誠一

【2】移転の先…「那古野」の選択

1 関ヶ原戦後の家康

1600年。家康は、天下分け目といわれた関ヶ原の戦いに勝利しました。しかし石田三成には勝ったものの、依然として大坂には秀吉恩顧の武将を従える豊臣家が健在でした。

家康は、それらの西国大名を懐柔する一方で、その力を削ぐために各大名を動員して自らの城や大坂包囲網とでもいうべき城の大改修を始めました。これがいわゆる「天下普請」とか「手伝普請」といわれる方法です。すなわち関ヶ原戦の直後から、

- 1601年 膳所城
- 1602年 二条城、伏見城、加納城
- 1604年 彦根城、江戸城 1
- 1606年 江戸城 2、長浜城
- 1607年 江戸城 3、駿府城 1
- 1608年 駿府城 2
- 1609年 篠山城 …と続きました。

またこの他にも、姫路城、伊賀上野城など大坂を囲む城に命じて、その大改修をさせたのです(図1)。

一方尾張の清須城は、外様大名の福島正則を加増して安芸に移したうえ、家康4男の忠吉を据えました。ところが期待をした息子でしたが、1607年不幸にも28歳で急死したのです。そこで家康はその後に、未だ8歳だった9男

の義利(後の義直。以下義直)を据え、国政は腹心の平岩親吉に任せました。

尾張の国は大坂戦を想定すると、鈴鹿ルートと関ヶ原ルートの合流する大変重要な位置にありました。が、その拠点の清須城は相当の規模があったとはいうものの、古いこともあって大軍を擁するような戦さに耐えられる城とはいえませんでした。1608年には尾張を囲む木曾川に、お囲い堤と呼ばれる堤防を築いて守りを強化しました。しかし城をどう改修するかは大きな課題だったのです。今回は、そのような状況の中で、なぜ遷府だったのか。なぜ名古屋だったのかを追ってみたいと思います。



図1 大坂城包囲網の城(文献④)

2

「那古野」の選択

(1) 氏勝の進言

遷府を具体的に家康に進言したのは義直の傅役の山下氏勝だとされます。氏勝はその時40歳。小田原攻めの時先鋒を務めるなどの活躍をした武将でした。ところがその進言の過程については、現在ではすこし意見が分かれています。それは、

- ①当初、家康の指示があったのか
- ②家臣団内での議論があったのか
- ③氏勝は直接家康に進言したのか

という点です。また、国政を担当していた平岩親吉の態度も藩の財政力を考えたのか、反対した、留保した、条件付で賛成したなどと、ここでも意見が分かれています。しかし、いずれにしても、氏勝が遷府を強力に主張したことは確かで、しかも尋常な方法では家康まで意志が届かなかったようです。

彼は、家康の側室で義直の生母お亀の方(後の相応院)の妹を妻にしており、義直の傅役でもあって自らの意見を直接家康に伝えることができる立場にありました。そこで、

- ・清須は度々洪水に見舞われていること、
- ・攻められると水攻めの危険があること、

から城を移すべきであると。その候補地は、①名古屋、②小牧、③古渡の古城址ではないか…と家康に伝えたようです。1608年のことでしょうか。ここに、遷府への動きがスタートしました。

(2) 3つの候補地

山下氏勝の提案した3つの候補地は、いずれも信長に関わった古城跡でした(図2)。

1つ目の名古屋(当時は、那古野)は、1522年、今川義元の父氏親が尾張を監視するための城を作り末子の氏豊を城主にしました。そこを信長の父信秀が奪取して改修し、那古野城としました。濃尾平野に突き出た名古屋台地の西北角で、清須を監視するには絶好の地でした。しかし当面する今川戦には不向きだったのでしょう。1534年信秀は南4[㍴]程の古渡に移りました。また残された信長も、1555年清須を奪って移りました。そして信長の死とともに放置されることになったのです。

2番目の小牧は、1563年信長が美濃征討の

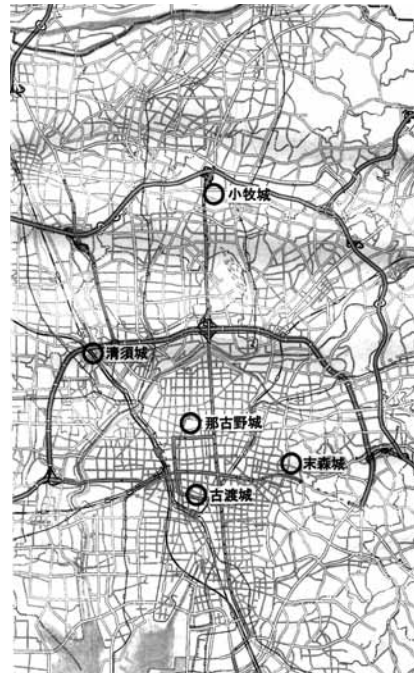


図2 山下氏勝のあげた清須城移転候補地の城と信秀の築城した末森城

ために築城し、清須から移った城です。濃尾平野の真ん中に屹立する標高86[㍴]の独立峰に築かれた山城でした。しかし美濃攻略が順調にいったため、信長は僅か4年で岐阜の稲葉山に移りました。その後放置されていましたが、1584年の小牧長久手戦の時には、犬山から侵入した秀吉に対して家康はこの山に陣を構えて対立しました。家康方が大改修しており、よく知っていた城跡でした。

3番目の古渡は、1534年先ほどの那古野から、今川戦のために信秀が移した城です。名古屋台地の東端の少し高みにあり、鎌倉街道沿いの地でした。しかし信秀は、1548年対武田・今川戦略上から6[㍴]程東に末森城を築いて移り、その後は放置されていました。信長はこの城で元服しています。

このようにみると、氏勝が提案したとされる3つの候補地は当時は何れも廃城でしたが、それぞれに理由のある立地だったといえます。

(3) 家康の判断

1609年正月。家康は動き出しました。1月7日に駿府を発ち、途中義直を同道し、25日には清須城に入りました。それから1週間ほど、家康は清須や名古屋の現地を自ら視察しました。そして名古屋への遷府を決めたようで、2月4日に駿府に帰りました。文献の中に、その中の2月2日、普請奉行を定めたと

いう記録があります。牧長勝、滝川忠征、佐久間征實、山城忠正、村田某の5人です。ただ少し早すぎるので1年間違っているのではないかといわれます。

そして11月16日、普請奉行の牧長勝は名古屋に来て縄張り(計画・測量)を始めたようです。正式な名古屋への遷府命令が出たのは、その11月16日という説と翌年1月9日という説があります。いずれにしても家康は諸大名に対し、名古屋築城の助役を命じたのです。九州を始めとする西国大名17家でした(後の3月に3家追加されています。)

『金城温故録』の中に、「古事録」からの引用として、次のような名古屋決定にあたっての家康の逸話が紹介されています。

あるとき家康が家臣に築城の場所はどこがいいかとたずねました。まず「尾頭(古渡)がいい」という声が出ました。本多正信は「名古屋がいい」といいました。そこで、家康が言いました。

「尾頭古渡に築かば、日本半国の勢をもって攻むるとも落つべからず。名古屋に築かば、日本中の勢をもって攻むるとも落つべからず」と。北側の湿地帯では馬が動きが取れないことを指摘したといいます。こうして名古屋への遷府は決定し、実現に向けて動き出すことになりました。

3 紀行 古渡の城

… もうひとつの候補だった城跡 …

それでは、決定した名古屋は後に分析することにして、まず落選した古渡の方の城跡を少し歩いてみましょう。

〈古城の跡〉

地下鉄名城線の東別院駅4番出口を出ます。すぐ幹線道路(大津通)を渡り、広い歩道を西に進みます。城郭の範囲は定かではありませんが、大きさは東西140メートル、南北100メートルで、2重の堀に囲まれていたとされます。明治時代の地図から想像すると、全体が東本願寺の名古屋別院(以下、別院)とそれを取り巻く範囲、今日の放送局と別院を含むエリアになりそうです。(図3)。

その別院の大きな山門を入ります。すると左手奥に「古渡城跡」の石碑が見えます。その辺りは地図からいうと古城の西南部になりそ

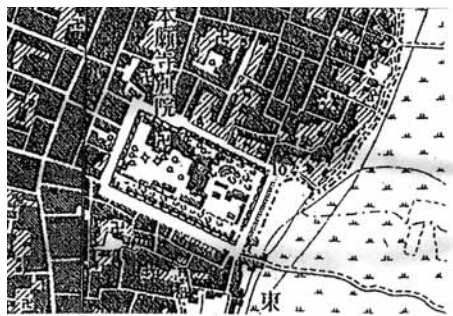


図3 古渡城跡とその付近。上は明治24年の地形図。上と下はほぼ同位置

うです。付近には名古屋城築城時の残り石があり、旧寺域内には29個が確認されているようです。

西門を出て右に進みます。突き当たりは栄国寺です。再び右に曲って別院の北側に出ます。すこし行くと左は橋公園です。寺の段は2メートルほどありますが、全体的に周囲に比べて



東別院(真宗大谷派名古屋別院)の大きな門。昔は堀があったのでしょうか？



境内隅にある古渡城跡の碑



別院北側の道。ここに古城の堀があった？

高くなっているとは感じません。この城の堀はどうだったのか。また城下はどうなったのかなどの疑問が起こります。信秀の14年間はとうだったのでしょうか。すこし進んで右側の坂を上ると下茶屋公園です。

〈台地の端〉

この公園は普通の都市公園とは違って日本庭園風です。というのもここは江戸時代後期に別院の奥座敷の庭として造られ、戦後市に譲られて公園になったからです。

中に入ると、中央低いところに池があります。公園はこの瓢箪型をした池をめぐるように造られています。高い所と池の面では10%近い差があります。階段を下って池の面に出ます。この池は古城の堀を使っているともいいます。水源はなく、湧き水だったのでしょいか。池の反対側に坂を上って振り返ると、向こうの高台に城があってもおかしくありま



下茶屋公園。めずらしい日本庭園の公園



公園の東から、西の高台(天守台跡?)を振り返る。堀のむこうに本丸？



公園の東南、大津通側から。
この積み上げられた堤は何だったか。

せん。尾張名所図会には、この公園の西側を「古渡城天守台跡」としているのです。

東北の角に公園の入口があります。隣接する大津通に出ると、高い石垣で区切られていますが、これは城の堤の名残りでしょうか。公園から東に地形は急に下っています。その先は、当時は精進川が近くまで蛇行していました。名古屋城の築城石が多いのも。石をここから陸揚げしたからだといえます。

城跡を歩いて感じるのは地形です。古渡城は明らかに東に向いています。新名古屋城は「西の敵」に向かい合うためのものだったので。南に行くとスタート地点の東別院駅です。

4 移転先名古屋の弱点

名古屋城の地は、東南に城下町にはちょうど良い大きさの平坦な台地がありました。地下水も豊富で、軍事面ばかりでなく城下の街づくりを考える上でも良い条件の土地でした。

しかし、ひとつだけ弱点がありました。水運です。台地の上にあり、周囲にも大きな川がありません。当時の城づくりは、舟入りが重視されていました。城や城下町の維持には舟による物流が欠かせなかったのでしょう。

家康は、名古屋に城を築くと同時に、海につながる堀を掘ることを命じました。名古屋台地の西側に、外堀にもなる大きな堀を。この事業には伊勢や美濃からの人を動員しました。総大将は福島正則です。そして正則の太夫の名を取った「太夫(たいゆ)堀」、後の堀川が掘られることになったのです。

〈主な参考文献〉

- ①「金城温故録」(『名古屋叢書続編13』、1964、市教育委員会)
- ②「編年大略」(『名古屋叢書4』、1962、市教育委員会)
- ③城戸久『名古屋城史』(1959、名古屋市)
- ④その他、名古屋市ホームページ等